

新カント派を出自とするドイツの哲学者エルンスト・カッシーラー（1874–1945）は、哲学史、科学哲学、美学など多岐にわたる業績を残したが、カッシーラーが歴史哲学者に数え入れられることはこれまでほとんどなかった。しかし、主著『シンボル形式の哲学』（以下 PhsF）は、シンボリック記号の発展を叙述した書であり、その叙述のされ方にはカッシーラーの歴史観があらわれている。カッシーラー自身は PhsF の段階では歴史の主題化に自覚的ではなかったが、同書をまとめなおした後期の著作『人間』では、歴史が新たなテーマとして取り上げられている。そのほか断片的な論考として、「ゲーテと歴史的世界」がある。

カッシーラーの哲学的立場の根本には、個別的なもののなかに普遍性が表出されているという「表出」概念がある。後期カッシーラーの著作で主題化されている歴史もまた、PhsF で扱われている「言語」「神話」「科学」と同様に個別的なものと普遍性を媒介するものとして考えられている。そして、カッシーラーに関する研究のなかで、重要な位置を占めてはいなかったこの「歴史」にこそアクチュアリティがある。なぜなら、歴史に関する普遍性と個別性の議論は、現代の歴史相対主義の問題に直結するからである。歴史相対主義は、「大きな物語」が終焉したことで有力になり、歴史を個別的なものにした。歴史を個別的に語れるという帰結はそれ自体に問題はないが、歴史修正主義者によって悪用されている。

歴史相対主義の問題についていち早く議論した人物として、ドイツの歴史学者フリードリヒ・マイネッケ（1862–1954）がいる。論考「歴史と現在」（1930/39）のなかでマイネッケは、相対主義に対抗する手段として、「ロマン的方法」（*Friedrich Meinecke Werke* Bd. 4, S. 96）と「進歩の楽天主義」（*Ebd.* S. 98）という方法があると主張している。前者は過去の一時代を賛美し普遍化することで、後者は未来に向かって普遍的な理想を掲げることで相対主義に対抗しようとする。しかしながら、前者は普遍化の仕方が独断的であり、後者は、第一次世界大戦の悲劇を人びとが経験していた同論考の執筆当時の状況においては、すでに疑わしくなっていた。また、両方法は歴史上に目標を定めるという点で歴史に対して水平的である。これに対しマイネッケは、垂直的な視点をもつことを推奨した。個別的な歴史事象に普遍性を与えることで相対主義に対抗する試みをマイネッケは提示したのである。

カッシーラーは、先述の「ゲーテと歴史的世界」のなかで同様の議論をおこなっている。同論考でカッシーラーは、歴史の個別事象を「俯瞰する *überschauen*」（*Goethe und die geschichtliche Welt* (Philosophische Bibliothek 474), S. 9）ことで精神史の普遍的法則を見いだすことをゲーテの思想から抽出している。歴史に関してゲーテの重要性に気づいたのはカッシーラーだけでなく、マイネッケもそうであった。普遍性と個別性にあいだを橋渡しするという両者の歴史観は、ゲーテを媒介にしてつながっている。ただし、マイネッケはこの橋渡しの役割を霊的な力とほのめかすにとどまっている。それに対してカッシーラーの独自性を強調するならば、それは、ここにも表出概念を通じた理論化が、暗示的にではあれ、なされていることである。本発表の出発点は、ゲーテを通じてカッシーラーが得た「歴史を俯瞰すること」を、表出概念の観点から明示化することにある。その際にはマイネッケの思想が参照軸として重要になる。そして、「歴史を俯瞰すること」という、歴史相対主義に抗しうる新たな方法を、彼らの議論を検討しながら提示することを本研究では目指す。